

當時予は車上に在り、偶々輕裘を着、肥馬に跨るの一壯士、二、三の從騎と共に、砂を蹴て前面より來り、我車側を過ぐる者あり。予之を瞥見して、威風の尋常ならざるを感じ、邦人に非らずやとの疑心を生じ、急に從者に命じて、追及尋問せしむ。暫くして氏は駒を回へし、相互に天涯の奇遇を喜び、一見舊知の如く、相携へて烏魯木齊城に入る。

林出氏は、上海なる東亞同文書院の卒業生にして、日露交戰酣なる時、感ずる所あり、深く不毛に入り、天山北路に流寓すること二年、今や歸國の途に就きしなり。予は單に天涯の奇遇を喜ぶのみならず、爾來同居數日、予が前程に、懇切なる教示を與へられしを多とするなり。特に録して其の高誼を謝す。

因に記す、林出氏は一たび歸朝の後、新疆巡撫の招聘に應じ、目下烏魯木齊法政學堂に教鞭を執り居る筈。

八 烏魯木齊

烏魯木齊（通稱迪化又紅廟子）は、東經八十七度五十九分、北緯四十三度四十五分に位置し、北京を距ること實に一千三百三十四里半に在り。此の地の沿革は果して